

明倫短期大学学会報告

明倫短期大学学会月例研究会抄録

平成14年12月に明倫短期大学学会が発足したため、従来の明倫短期大学研究会にかわって、月例研究会が平成15年4月より始まった。

今年度は4月24日の第1回（通算84回）を始めとして、10月23日まで計6回開催された。以下、総計12名の演者の方の抄録を掲載する。

（文責 福島祥紘 歯科衛生士学科）

第1回（通算第84回）：2003年4月24日（木）

デンタル・カラーコーディネートのための色彩調和論

木暮 ミカ（講師、歯科技工士学科）

歯科技工では残存歯のアピアランスを再現させることに忠実でありすぎて、顔全体を視野に入れた補綴物の製作は希少である。そのため、いかに高度なテクニックや材料を駆使して隣在歯と全く同じように製作したとしても、それが患者の理想と異なった色（形）と判断されれば補綴物の装着を拒絶されてしまうこともある。今回は歯を治療する際の審美性について、特に顔面における色の健康的な調和という観点から色彩調和論を述べる。

高齢社会の現状と歯科的問題 —要介護高齢者の場合—

本間 和代（助教授、歯科衛生士学科）

歯科衛生士が歯科訪問診療や居宅療養管理指導等に携わる機会が増えてきたが、事前に高齢者の心身の状態、家庭環境などを知っておく必要があり実態調査を行った。その結果、要介護高齢者は平均2.5疾病を有し、5.7種類の薬剤を服用していた。口腔内不快症状は、口渇が最も多く、問題点としては義歯の不良が38%と最多であった。独居、老人世帯が約半数を占め、歯科への受療行動も困難が伴うことから、今後益々、介護予防が重要となる。

第2回（通算第85回）：2003年5月22日（木）

口底がん切除と放射線治療後の 顎欠損患者への摂食、 嚥下リハビリテーションの1例

野村 章子（教授、歯科技工士学科）

口腔がんの手術後に摂食・嚥下機能障害を訴えた顎欠損患者1例に対して、新潟大学歯学部附属病院の画像診断、義歯、加齢歯科、歯の4科の歯科医師が行ったチームアプローチとその機能的評価を紹介した。続いて、一般の摂食障害、嚥下障害を有する患者に対して、歯科医師、歯科技工士、歯科衛生士、言語聴覚士、栄養士が参画する明倫短期大学附属歯科診療所スタッフが担う総合的治療と食生活支援体制を提案し、会場から種々のご意見をいただいた。

小児歯肉由来細胞のNaFによる アポトーシスとネクローシス

小黑 章（教授、歯科衛生士学科）

移植片培養法により分離した小児歯肉由来細胞（継代数10-15）は0-20 ppm F^- （0-1.05 mM NaF）存在下、2、3日から5、6日の培養において、0-5ppm F^- （0-0.26 mM NaF）ではNaF濃度にかかわらず増殖し、20ppm F^- （1.05mM NaF）により死滅する。また、10ppm F^- （0.53mM NaF）存在下において播種濃度を保つ。この小児歯肉由来細胞の単層細胞膜に50ppm F^- （2.63mM NaF）を24時間作用させたところ、ネクローシスによると思われる細胞死を引き起こした。さらに高濃度の F^- に8-24時間暴露すればアポトーシスを引き起こすものと思われる。

第3回（通算第86回）：2003年6月26日（木）

今後の歯科技工士の養成 —専門基礎教育的カリキュラム検討—

藤口 武（助教授、歯科技工士学科）

歯科医療の多様化・高度化に対応できる歯科技工士を養成するために、大綱化ならびに単位制の導入が検討されている。これに対応できる新設教育科目カリキュラムならびに教育年限について検討し提案された専門基礎教育カリキュラムの内容を報告。

結論：大綱化するためには2年制では教育時間が過密で実現が困難であり、3年以上に延長することが必要である。